紙上講座 ―

百年ほど昔、沢入駅から賽の河原への道々の記 その1

～岩澤正作氏著『渡良瀬川峡内澤入塔見聞記』より～

講師 藤井 実さん（東町花輪）

本稿は、岩澤正作氏が大正十四年七月『上毛及上毛人』に著した『渡良瀬狭内澤入塔見聞記』を参考にしています。

百年ほど昔、沢入駅から賽の河原への道々の記です。往時を知ることのできる貴重な著です。

氏は、『黒川峡と澤入塔』の「叙文にかえて」の文中に、

東西みんなみにきた
黒川の史蹟名勝
よんできかせよ

と記しています。

本稿は、この貴重な著を、以下現代語訳にして、多くの人の目にとまっていただけることを期して編集したものです。

紙面の関係から、「澤入驛より不動瀑迄」から始めます。

沢入駅より不動滝まで

沢入は古くは「草入」と書き、「さうり」と読んだ。

勢多郡の東端東村の最も東にあり、栃木県と接する「大字春場見」の渡良瀬川中には有名な「板東太郎夫婦岩」がある。

この石は、お伊勢参りをしたという伝説を持っている有名な巨石である。また、だんだんと上流に動くと不思議がられている巨石でもある。

河中の「岩塊が動く」という言い伝えを持つ石を調べると、このような石は全国には少なからずある。坂東太郎石に限ったことはないのである。

要は、河中の砂礫上にちょこんと立っているだけの岩塊は、洪水のたび、上流側の砂礫が削られ運び去られる。すると岩塊は上流に向かって倒れる。これを「石が動く」と伝えられた。

私は科学的に説明して此の名石をけがすつもりはない。

またこの石には、江戸時代初期、ある大名が日光廟前の燈籠の石材として採取しようとし、石工が石割矢を入れると、はね飛ばされ即死したとか、気絶したとかの言い伝えがある。

こうした口碑伝説を持った名石も、明治三十五年九月の大洪水に夫婦の一石は、その根腰を深く洗われため遂に倒され、大分景観が変わってしまった。

「字春場見」から少し東に「字楡澤」と云ふ所がある。そこには義経の遺臣亀井六郎の系統が伝わっているそうだ。

話が大分わき道にそれたが、沢入駅は渡良瀬川の左岸向澤入にある。沢入橋を渡って右岸の「字橋場」に出て、小坂を上ると沢入宿の街道である。

右折して進むと大沢寺の門前に出て、西北に進むと間もなく板倉川の斜面に出る。

沿道は杉林と雑木林とが入り混り心地よい森が続いている。

道ばたで目にとまった花は、クサノオウ、ムラサキケマン、コンロンソウ、ウツギ、キジムシロ、ミツバウツギ、ツクバネウツギ、オトコヨツドメ、マムシグサ、チゴユリ、ヒメウツギ、スミレ、ツボスミレ、エゾスミレ、ヤマツゝジ、サワフタギ、キイチゴ、コバタゴ、ガマズミなどである。

寺の前から約十五分程進むと、「字イボ沢」と云ふ所で道端の右側に一大岩塊が突出し岩屋のような形をしている。この岩こそが沢入塔の第二台石であった。

その昔、天狗が板倉橋附近の小田巻の淵の右岸にあった沢入

塔を、一夜の中に塔の沢の寝釈迦のそばに運ぼうとして、段の上部から運び、第二台石をここまで運んできた。

時は丁度師走。民家では正月の支度に忙しく、夜半から起きて餅をついていた。天狗はその音を聞いて、人間が起ているということは夜明けが近いと考え、台石をここに置いたまま去つたと伝えている。

この里では、近年まで夜の明けぬうちは餅をつかなかつたそうである。

約十分ほどで「字ミョウガん手」に着く。ここに青年会が道標を建て、「右澤入塔道、參拾丁」。「左西山。小中道」と記してある。板倉川は此の附近で塔の沢川と西山川とに別れる。

塔の沢川に沿って右に進むと三・四分ばかりで川の水が流れ落ちる音が耳に響き、前面に滝が現れる。

滝は塔の沢の河底の断崖にあり二段になっている。上段は高さ約三間ほどで勾配があり、下段は高さ約五間ほどでほとんど直下している。下段の右岸の崖岩上には、等身大の不動尊像を安置し「不動滝」と呼んでいる

不動滝から賽米の塔

谷あいの景観は不動滝辺りからはじまる。

谷の両岸は次第に狭まり壁はそびえ、岩の割れ目の節理は縦横にはしり、箱をいくつも積み重み上げたような形をしたり、節理に沿って一部そこから剥離し岩窟のようになったりしている所もある。

花崗岩地特有の景観となっている。

道ばたにはミツバツツジ、ヒトツバカエデ、ラショウモンカヅラ、ミヤマケマン、ヤシヤブシ、カンスゲ、クワカタソウ、ミヤマハコベ、ミツバツチグリ、トチノキ、アサノハカエデ、ワダソウ、チャルメラソウ、エンレイソウ、フタバアオイ、クリンユキフデ等花を着けていた。オオバクロモヂ、ウリノキ、ツクバネノキなど見えたがまだ蕾すら認めなかつた。

ふと見ると草葉の上に何やら細粉が附着している。

よく見ると火山灰らしい。前日降下した焼ケ岳のものか。

進むに従ってワダソウ、チヤルメルソウ、エンレイソウ、フタバハギ等の群落を見付けた。

不動滝から二十五分ばかり進むと岐路があり「右、川を渡りて塔の澤道十八丁。左、賽米の塔道」とある。

案内者の話によると、旅人の中には左折して上り「賽米（せいまい）の塔」を見て引き返すもの者もいるという。

左折してラショウモンカヅラの咲き乱れている坂道を一丁ほど上り、そして一丁ばかり下ると対岸に、切石を積んで作つたような多重塔形をしたいわゆる「賽米の塔」がそびえている。

これに関する何らかの口碑を聞いてたが忘れたので、案内の者に聞いたがわからなかった。塔の高さは三丈餘である。

沢の奥の方を見ると、節理によって露出した奇岩怪石が乱立し、山ツツジの花がこれを飾っていた。さだめし秋の紅葉も見ものであらう。

現在「賽米（せいまい）の塔」の所在は不明です。地元でもその場所を知る人は見当たりません。この意味からも岩沢氏の著『黒川峡と澤入塔』『渡良瀬川峡内澤入塔見聞記』は東町にとって貴重な著なのです。

次回は「般若の滝」からはじまります。